

インタビュー

加瀬 邦彦

さん

生涯現役く歌と仲間とともにく

ヴィンテージもののTシャツ姿で

颯爽と現れた加瀬邦彦さん。

愛用の十二弦ギターを片手に

今も年間八〇本以上ものステージで観客を沸かせる

ザ・ワイルド・ワンズのリーダーとして

銀座のライブハウス「ケネディハウス」のオーナーとして

音楽のすばらしさを伝えようと情熱を傾けている。

エネルギーギッシュな活動の源は何か？

その秘密をうかがった。



Kunihiko Kase

PROFILE

【かせ くにひこ】1941年（昭和16年）東京生まれ。慶應義塾大学法学部政治学科卒業。大学在学中より、数々の人気バンドに参加。1966年にザ・ワイルド・ワンズを結成し「想い出の渚」でデビュー。日本のグループサウンズを代表するバンドとして一世を風靡。1971年に解散後は、作曲家としてキャンディーズ、アン・ルイス、早見優など多くのアーティストに楽曲を提供する一方、沢田研二の音楽プロデューサーとして活躍。代表作に「追憶」「TOKIO」「危険な二人」がある。

1981年、ザ・ワイルド・ワンズを再結成。1983年よりライブハウス「ケネディハウス」のオーナーでもある。

ホームページ：www.wildones.co.jp



今までに無い 新しい日本のポップスを作りたい

——一九六〇年代後半、日本の音楽史にグループサウンズという一時代を築いたザ・ワイルド・ワンズ。その結成当時のエピソードとご自身のおかげです』を読ませていただきましたが、ザ・ワイルド・ワンズの誕

生は、加瀬さんが、エレキブームで人気絶頂だったブルー・ジーンズを脱退されたことに端を発したとか。メンバー集めの段階から、かなりこだわりのあったそうですね。

僕は、大学二年のとき友人に誘われてキャノンボールに参加して以来、スパイダース、ブルー・ジーンズと、プロとしていくつかのバンドを経験していたんだけど、その頃

のバンドには終戦直後の米軍基地で活動していたバンドマンからの流れを汲む、独特の気質と臭いがありましてね。楽屋では音楽の話の代わりにポーカーや麻雀に興じているような雰囲気、それが僕は嫌だった。だから、新しいバンドのメンバーは、まず、プロの経験がない学生のアマチュアにこだわったんです。

それに、僕が尊敬するビートルズのようなバンドにしかかったからアイビールックが似合って、これからのテレビ時代にふさわしくお茶の間で受け入れられる清潔感のある人、という条件も加え

て、友人・知人から紹介してもらったり、雑誌で呼びかけた中から選んだのが植田芳暁、鳥塚しげき、島英二の三人でした。

メンバーが揃ったところで合宿に行っただけけれど、初日に音を出してみたらあまりにも下手で、考えが甘かったなあと思いましたよ（笑）。それまで僕と一緒にやっていたのは、経験豊富なプロのバンドマンばかりでしたからね。またメンバーを探さなきゃいけないと考えていた矢先、葉山マリナーナのプールサイドで演奏することになったんです。

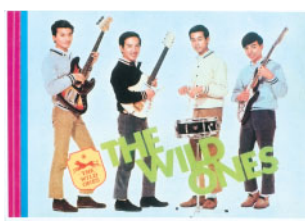
最初は誰も聞いていなかったのが、日を追うごとにお客さんが増えてきて、そのうち毎日聴きにきてくれる近所の女の子なんかも出てきたりして。メンバーも若いから一カ月も経たないうちに、ある程度腕を上げてきて、ぎこちないけれど今までのない新鮮さがあって、このままだけりかもしれないなど。それで合宿から帰ってきたら、所属事務所からデビューが決まった話を聞いたんですよ。

——デビューシングル「想い出の渚」は、当初B面での発売予定だったとか。

そうですね。レコード会社は僕がブルー・ジーンズにいた頃に作っ



初版のジャケット



10万枚を超えたジャケット



た「ユア・ベイビー」のほうが、実績もあるし、安全だからA面にすると言ってきた。ところが、僕としてみれば、今までに無い、新しい日本のポップスを作っていきたいという強い思いがあつてザ・ワイルド・ワンズを結成したわけだからね、どうしても譲れなかったんですよ。

それに、レコード発売は十一月なのにタイトルに「渚」なんて付いている海の歌は非常識だろうとも言われてね。僕は「何を言っているんですか！夏の失恋を思い出して歌うと

ころがいんじゃないですか」と反論、「A面にしてくれなければ辞めます」と強硬な姿勢で「想い出の渚」でのデビューを押し切ったんです。

レコードジャケットも気に入らなくてね。期待していたビートルズのイメージと全然違って、皆暗い顔をしているし、新しい臭いがしないんですよ。印刷の都合上、明るい雰囲気のリコードジャケットは初版には間に合わなかったけれど、一〇万枚を超えたら変えるという約束をして、新しいジャケットの写真撮りも済ませていました。だから、発売から一〇日間で、注文が一〇万枚超えたときは、嬉しかったね。

解散から一〇年 軽い気持ちで引き受けた再結成

——鮮烈なデビューを果たし「愛するアニタ」「青空のある限り」「夕陽と共に」など数々のヒット曲を出されましたが、グループサウンドズが下火となった一九七一年、ファンに惜しまれつつ解散されますよね。その後、皆さんどうされたのですか？

メンバーは、それぞれソロや新しいバンドを結成して音楽活動を続けるという道を選んで、僕は作曲家として楽曲を提供したり、ジュリー（沢田研二）の音楽プロデューサーと

して、国内やヨーロッパでの活動など全面的に関わっていたんですよ。

——そんな中、一九八一年に再結成されていますが、きっかけは何だったのですか？

きっかけはね、東京・有楽町にあった日劇が取り壊されることになって、最後に開催される日劇ウエスタン・カーニバルへの出演依頼。都合がつかなかった渡辺茂樹を除く、オリジナルメンバー四人で再結成してステージに立ったんです。

それを見たレコード会社三社から、「レコードを出しませんか」というオファーがあつて。というのも、その当時サーフィンが流行り始めていて、海のイメージが強いザ・ワイルド・ワンズが目にとまったらしいんです。正直そんなに乗り気ではなかったけれど、ハワイでのレコーディングを条件に引き受けてみた。だからといって、復活しようなんてつもりは全くなかったですよ。

思い出の葉山マリナでコンサートも開くことになったけれど、予想を遥かに上回る五千人近くのファンが集まってね、ラジオの生放送やテレビのワイドショーも入って大いに盛り上がりましたよ。それでも、「まあ、この夏だけやればいいや」くらいの気持ちでした。

「人間って、気持ちの持ち方で変わるんだ」 ということ、 身をもって体験しましたよ

ちようどその頃、僕は大学時代の友人に誘われてライブハウスを共同経営することになって、「せっかくだから、ザ・ワイルド・ワンズも月一回遊びでやるか」という乗りで、ライブに出るようになったんです。

グループサウンズ時代から、自分は裏方でやっているほうが向いているんじゃないかなと思っていたけれど、ステージに立って自分でギターを弾いたり歌ったりしながら、プロデュースをしたり考えたりするのも楽しいかなと。ジュリーのプロデュースに区切りがついたこともあって、自然にザ・ワイルド・ワンズとしてステージに立つ回数が増えていったんです。とは言っても、そんなにずっとやっていくなんて思っていなかったけどね。

生き方を考えさせられた 食道ガンでの手術

——乗り気じゃなかった再結成後、二五年もの長きにわたりオリジナルメンバーで活動が続けていらっしゃいますが、何か心境の変化があったのですか？

実は、五三歳のとき食道ガンになつてね。まさか自分が、と思いましたよ。転移が早いからと、あまり考える時間もないまま手術ということ

になって、外科医が三人がかりで何時間にも及ぶ手術。脇腹と背中を大きく切つて、肋骨も機械で開いて、食道を切除し胃を縦半分に切つて細長くして、喉と直接つないだんです。

集中治療室に三日間入った後、一般病室に移されたんですが、その日、窓の外に東京では珍しく大きな虹がかかってね。それが三回も。

——えっ？一度に三回もですか！

そう。不思議ですよ。その虹を見ていたら、「僕はなるべくしてこの病気になったんだ。生き方を変えなくちゃいけないんだ」と思うようになった。

それからですね。「パジャマを着てベッドに寝ていたら病人みたいだ」と、体から管が何本も出ていたけれど、Tシャツにハサミで穴を開けてそこから管を出し、短パンを履いて、病室のテラスにプールサイドでよく見かけるビーチベッドを置いて寝転がっていた。CDを聞きながら、新聞なんか読んでいる僕の姿を見た医者に「加瀬さん、ここはハワイじゃないですよ」と言われましてね（笑）。僕だつて不安がなかったわけじゃないけれど、手術をして腫瘍は取ったから、後は傷口が治るのを待つだけで、病人じゃないと思うようにしたんです。

結局、最低二カ月は必要といわれていた入院もわずか三週間で退院。医者にも「気持ちの持ち方つて、大切なんですね」と感心されました。

年相応じゃつまらない いい意味でファンを裏切りたい

それからというものの、氣功を始めた、今まで読まなかった分野の本を読むようになって、自分が何のために音楽をやってきたのか、これから何をやっていけばいいのかを真剣に考えるようになりました。

ザ・ワイルド・ワンズとしてステージに立つたときも、今まで以上に、お客さんに喜んでもらうことが、とても重要に思えるようになりましたね。地方公演で、何十年かぶりに



年齢は関係ない！ 自分のやりたいことに向かって努力すれば、 得られるものは大きいはずですよ

加瀬邦彦さんのご協力により、
平成17年12月1日から約1カ月間
ザ・ワイルドワウンズのあのヒット曲
「想い出の渚」を聴くことができます。

今すぐアクセス！

財団法人 地方公務員等ライフプラン協会のホームページへ
<http://www.lifeplan.or.jp/>

ザ・ワイルド・ワウンズのコンサートに足を運んでくれたお客さんが、普段は見せないような楽しい顔で「アンコール！」って叫んでくれる姿を見て、仕事冥利につきるなあって、改めて感じるようになったんです。

スペシャルコンサートでは、毎回新しいことにチャレンジしているんですが、去年はデキシールランドジャズバンドと、一昨年はバレリーナとコラボレーションしましたね。

——グループサウンズとクラシックバレエですか。思いつかないですね。

それだけじゃないですよ。キャンディーズやピンク・レディー、モーニング娘。のヒット曲を、振り付けしながらメドレーで歌ったこともあったね。そのときは、会場から「オヤジたちが、よくやったぞ！」という大拍手が沸き起こったんですよ（笑）。

ザ・ワイルド・ワウンズのファンとすれば昔のイメージとのギャップに戸惑いがあるかもしれないけれど、

僕はいい意味でファンを裏切りたいと思っているから。年相応のことをやっていてもつまらないし、意外なことをやって、お客さんが「俺たちも負けちゃいけないな」という気持ちになってくれば本望ですよ。

生の音楽を聴いて感動することって心の栄養になるから、僕は、これからますます必要になってくると思っているんです。だから、皆さんも積極的にいろんなところに足を運んで、感動する自分を作っていってほしいですね。

音楽じゃなくても、それまで食べたことのないものを食べてみるとか、行ったことのないところを旅してみるとか、何でも興味を持つこと、やってみることが大切なんですから。年を取れば取るほど逆に、新しいこととにどんどんチャレンジしていこう



という精神が必要になってくるんですよ。

四〇周年記念コンサートは ビートルズと同じ武道館で

——加瀬さん自身は、これからどんなことにチャレンジしていけるつもりですか？

去年、三八周年コンサートが終わった後、僕は「ザ・ワイルド・ワウンズ結成四〇周年記念コンサートは、武道館でやりたい！」と宣言したんです。四〇年前と言えば、ビートルズが初来日して、アーティストとして初めて、国技場である武道館をステージにした年ですよ。その武道館で、二〇代にもできなかった規模のコンサートを、今の僕らでやりた

年を取れば取るほど逆に、 新しいことにチャレンジする 精神が必要になってくるんですよ



いと思った。できるわけがないと思うのが普通だろうし、一万人規模だから普通にチケットを売るのは無理だろうけれど、僕はことあるごとに周囲に武道館でのコンサートを宣言しています。

そうすることで、「協力しますよ」と言ってくれる人が次々に現れてきて。ザ・ワイルド・ワンズを支えてくれているファンには団塊の世代の人が多いけれど、そんな彼らの中からも協力を申し出てくれる人が出てくれるから、嬉しいですよ。

例えば、それが実現できなかったとしても、武道館に代わる五千人規模の会場でできるかもしれないし、それが無理でも三千人規模のところまでできるかもしれない。いずれにしても、それまでよりは前進するわけだから、いいじゃないかと。

「武道館」を掲げたことによって、メンバーの気持ちも変わってきた。まず体力ということで、各自ジムに通うなどしてトレーニングを始めたし、発声練習ももう一度や

り直したいと思って、月に二、三回メンバーが集まって専門のボイストレーナーからレッスンを受けている。今日も、この取材の前にトレーニングを受けていたんです。ボイストレーニングを始めてから、声がよくなっていることが実感できるし、来年はもっとよくなっていると思うんですよ。

これからは 本当に好きなことがやれる

——武道館という目標に向かって、加瀬さんをはじめザ・ワイルド・ワンズの皆さんはチャレンジを続けていらつしやいますが、これから定年退職を迎える団塊の世代の読者に向けて、充実したセカンドライフを送るためのアドバイスをお願いします。

サラリーマンであれば、現役時代は誰もが好きな仕事をやってきたわけじゃないでしょうけれど、これからは本当に自分がやりたかったことをやる時期なんだと思いますよ。そのためには、努力も必要になってくるでしょうね。

日本人って、楽しむことが下手ですよ。周囲の顔をうかがって、それに合わせていかなくちゃいけないという意識が強いんだけれども、

自分がやりたいことをやればいいんじゃないかな。

洋服でも、年だからこの服着ちゃいけないという決まりはないですからね。若い服でも着たければ着ればいいし、それが似合う体を作っていけばいいじゃない？ 僕なんかストリート系ファッションのメッカ・裏原宿にもよく行きますよ。妻には「あなた、よくそんなところに行けるわね」と呆れられるけれど、恥ずかしくも何ともない。気に入った店で仲良くなった若い店員さんから「加瀬さん、あの服入荷しましたよ」なんて電話がかかってきたりすることもあるし。同級生から若作りだって冷やかされても「俺は、皆と同じように、おっさんみたいな格好したくないから」って言い返していますよ（笑）。

仕事にしても遊びにしても、年齢や周囲の目にとらわれて、しばらくしているのはもったいないよね。大事なのは自分の気持ちですよ。どう生きたいのかを大切に。人生のお楽しみは、これからなんですから。

——来年、再来年のスペシャルコンサートも期待しています。お話ありがとうございました。

こちらこそ、ありがとうございます。